

委託事業実施内容報告書

平成23年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業

【日本語指導者養成】

受託団体名 財団法人とよなか国際交流協会

1 事業の趣旨・目的

豊中市は、大阪の北部に位置する外国人の少数散在地域であり、外国人は約 4,700 人で市の人口の 1.18%を占めている(2010 年 12 月時点)。子どもの状況に目を向けると、小中学校に在籍する外国人児童生徒数は約 100 人、帰国児童生徒は 200 人を超える。市内には、帰国児童生徒受け入れの 40 年の歴史をもつ小中学校や、大阪大学があることから留学生や研究者の子どもが在籍する小学校があるが、こうした一部の小中学校をのぞいては、外国につながる子どもは散在して存在している。韓国・朝鮮につながる子どもも含め、国際結婚で生まれたダブルの子どもや呼び寄せられた子どもが多く、中国、韓国、フィリピン、タイ、ペルー、ブラジルなど多様な国にルーツをもつ子どもが各学校に 1 人、2 人という少人数で在籍している。子どもたちの多くは、文化的背景を豊かなものとして積極的に押し出す機会のないまま、潜在化される状況にある。

近年、市内及び近隣地域において日本語に蹟く子どもたちの多様で深刻な課題が明るみになってきた。渡日の子どものだけでなく、帰国した日本人の子どもでも現地校に長年通っていたため母語が日本語でなかったり、国際結婚で呼び寄せられた子どもやダブルの子どもたちが生きていくために必要な日本語を十分に身につけられていないという状況が出てきた。子どもたちの通う学校で日本語指導の体制づくりが望まれるが、学校教育の中だけで取り組むには限界がある。一方、地域には日本語指導の経験豊かな指導者やボランティアがいて、さまざまな公共機関や研究機関、民間とつながりネットワークを構築している。こうした人たちが、発達段階にある子どもへの日本語指導にかかわり地域で子どもたちを支えることが今後一層重要になってくる。

とよなか国際交流協会では、生活者としての外国人のニーズに応じた日本語学習の機会や多言語による相談サービスを実施しており、とよなか国際交流センターには外国人市民の「磁場」が既に築かれている。また、日本語指導や外国人支援、教育実践に取り組むボランティアや実践者、専門的な知識と技術をもつ経験豊富な人たちが集う「土壌」がある。本事業は、こうした磁場と土壌を活かし、日本語に蹟く子どもに初期日本語指導、生活力につながる日本語学習支援までをおこなう日本語指導者の養成、並びに修了後にとよなか国際交流センターで行なう日本語教室の設置運営を視野に入れた実践的指導者の育成を目標にする。それを可能にするのが、スーパーバイザーによる日本語指導サポート体制である。長年子どもの日本語指導にたずさわってきた経験豊富な講師 2 人(うち 1 人はコーディネーターも兼ねる)が、スーパーバイザーとして、講座受講生にきめ細かい助言やサポートを実践的に行う。

また、教育委員会や学校など行政との連携は子どもの日本語指導をすすめるにあたって欠かせないものである。市内小中学校の日本語指導担当者や通訳者、子ども日本語指導者(地域ボランティア)など、支援者のネットワークを構築し、子どもの日本語保障を目指す仕組みづくりにも力を入れる。行政と地域がそれぞれの強みと弱みを持ち寄り、協会が子どもに日本語指導をおこなう指導者(ソフト面)を育成し、学校と役割分担及び連携をしながら支援体制(ハード面)を構築していく素地をつくっていくこととする。

2 運営委員会の開催について

【概要】

開催日時	開催場所	出席者	議題	会議の概要
5月7日 13:00 ～15:00	とよなか 国際交流 センター	子どもの日本語指導者スーパーバイザー（大阪市教育委員会日本語指導協力者、元大阪市立中学校帰国した子どもの教育センター校教員） 地域日本語ボランティア（とよなか国際交流協会 日本語ボランティア） 日本語指導者（豊中市教育委員会） 大阪大学大学院生日本語教育専攻 とよなか国際交流協会職員 合計 9 人	日本語指導が必要な子どもの状況と課題	・とよなか国際交流協会に日本語の切羽詰った相談が相次いでいるが、専門的に指導できるノウハウも人もない。 ・課題①人づくり（日本語指導者育成） 豊中市の退職教員や現場の先生、地域のボランティアを対象に、子どもための日本語指導者を育成する養成講座を開催する。教室で実際に実践を積み上げる形式で行なう。授業の組み立て方や指導案づくりなど、系統立った指導ができる人材を育てる。授業や指導のビデオ撮りを行い、授業研究に活かし、誰でも使用できる教材づくりへと将来的に発展させる。 ・課題②教育委員会との連携 実際に教室が開始したとき教育委員会や学校との役割分担及び連携を進める。
6月4日 13:00 ～15:00	とよなか 国際交流 センター	子どもの日本語指導者スーパーバイザー（大阪市教育委員会日本語指導協力者、元大阪市立中学校帰国した子どもの教育センター校教員） 地域日本語ボランティア（とよなか国際交流協会 日本語ボランティア） 日本語指導者（豊中市教育委員会） 大阪大学大学院生日本語教育専攻 とよなか国際交流協会職員 合計 9 人	必要な支援システムの構築について	・スーパーバイザーによる日本語指導サポート体制（田中薫さん：元大阪帰国した子どもの教育センター校、宮阪蓉子さん：大阪市教育委員会日本語指導協力者） ・子どもそれぞれの日本語のレベルと状況に応じてカリキュラムを作成し、毎回の授業に先立ち指導計画をつくり指導にあたる。学校との連携により、初期日本語指導だけでなく、学校の授業についていけるよう、また学力につながるような指導を行う。 ・豊中市協働事業市民提案制度に申請し、豊中市教育委員会と協働して、こども日本語教室を運営し、豊中市における子ども日本語指導のシステムづくりを目指す。 【事業名】とよなかこども日本語教室を拠点とした、学習に必要な日本語力・生活力の保障とそのシステムづくりのための事業

【写真】運営委員会の様子



3 養成講座の内容について

(1) 講座名 日本語に躰く子どものための日本語指導者養成講座

(2) 目標

(3) 受講者の総数 44 人

(出身・国籍別内訳 中国 4 人 韓国・朝鮮 1 人 フィリピン 1 人 台湾 1 人 日本 37 人)

(4) 開催時間数(回数) 42.5 時間 (20 回)

(5) 参加対象者の要件

日本語指導に関心をもち、養成講座修了後に開かれる子どもの日本語教室に週 2～3 回継続的に関われる人。通訳などバイリンガル話者で日本語指導に関心のある人。教職員で日本語指導担当者や日本語指導に関心のある人。

(6) 受講者の募集方法

関係機関や豊中市内の公共機関に送付されるとよなか国際交流協会『おしらせ』、豊中市内全戸に配布される『広報とよなか』で広報。豊中市教育委員会を通じて全小中学校に養成講座の案内チラシを配布。

(7) 会場 とよなか国際交流センター

(8) 使用した教材・リソース

パワーポイント、プリント、オリジナル教材等

(9) 講座内容

開講日時	授業のテーマ	授業概要	講師	受講生数
2011/7/23 13:30～15:30 15:45～17:45	日本語指導実践の前に知っておくこと	とよなかこども日本語教室の開設について(運営方法や構想)。日本語指導がなぜ必要か。大人の日本語指導と子どもの日本語指導。日本語指導で指導すべきこと。初期指導を効果	田中薫(元大阪市立豊崎中学校帰国した子どもの教育センター校 現とよなか国際交流協会 子どもの日本語	39 人

		的に進めるための留意事項	指導者スーパーバイザー)	
	小学校低学年の日本語指導の実際	低学年児童への指導での留意点。言語指導で気をつけること。具体的な指導方法(文型指導・文字指導・作文指導・読むことの指導)。とよなかこども日本語教室での指導について	宮阪蓉子(大阪市教育委員会日本語指導協力者)	
2011/7/30 10:00～12:00 13:00～15:00 15:45～17:45	豊中に住む日本語指導が必要な子どもの状況	全国・大阪府・豊中市の外国人登録者数。豊中市の帰国・外国人児童生徒の数。豊中市における帰国・外国人児童生徒支援事業(プレクラス・帰国教室・国際教室・通訳/日本語指導者の学校派遣)の紹介。	松岡公宏(豊中市教育委員会人権教育室 室長)	27人
	カリキュラムと指導案づくり	日本語能力判定基準表の見方。必要な指導内容を見据えたカリキュラム。指導案について(全体指導の持ち時間の中でできること・毎時間力がついたと実感できる指導案)	田中薫	
	教科学習につながる日本語学習	基礎学力と日本語。学力につなげる授業姿勢。日本語レベルごとの教科指導につなげる視点	田中薫	
2011/8/6 14:00～16:00 14:00～16:00 14:00～16:00	指導現場の見学と指導記録(高学年の授業)①	実際の指導現場の見学。指導記録をとり、授業についての意見交換	田中薫	3人
	指導現場の見学と指導記録(低学年の授業)①	初期指導をロールプレイングで体験する。どのような教材を使うか。どのような手順でするのがよいか。終了後、感想を言い合う	宮阪蓉子	2人
	指導現場の見学と指導記録(低学年の授業)①	初期指導をロールプレイングで体験する。どのような教材を使うか。どのような手順でするのがよいか。終了後、感想を言い合う	吉田美美(大阪市教育委員会日本語指導協力者)	4人
2011/8/8 14:00～16:00 14:00～16:00	指導現場の見学と指導記録(高学年の授業)②	実際の指導現場の見学。指導記録をとり、授業についての意見交換	田中薫	4人
	指導現場の見学と指導記録(低学年の授業)②	実際の指導現場の見学。指導記録をとり、授業についての意見交換	宮阪蓉子	4人
2011/8/22 14:00～16:00 14:00～16:00	指導現場の見学と指導記録(高学年の授業)③	実際の指導現場の見学。指導記録をとり、授業についての意見交換	田中薫	6人
	指導現場の見学と指導記録(低学年の授業)③	実際の指導現場の見学。指導記録をとり、授業についての意見交換	宮阪蓉子	4人
2011/8/27 14:00～16:00	指導案作成と実践(高学年の授業)①	授業の一コマを担当する。そのための指導案細案を作成する。実際に指導してみる。担当者以外は指導記録をとり、感想を言い合う。	田中薫	4人

2011/9/1 16:00～18:00	指導案作成と実践(高学年の授業)①	授業の一コマを担当する。そのための指導案 細案を作成する。実際に指導してみる。担当 者以外は指導記録をとり、感想を言い合う。	田中薫	4人
16:00～18:00	指導案作成と実践(低学年の授業)②	授業の一コマを担当する。そのための指導案 細案を作成する。実際に指導してみる。担当 者以外は指導記録をとり、感想を言い合う。	宮阪蓉子	4人
2011/9/3 14:00～16:00	指導案作成と実践(低学年の授業)②	授業の一コマを担当する。そのための指導案 細案を作成する。実際に指導してみる。担当 者以外は指導記録をとり、感想を言い合う。	宮阪蓉子	9人
2011/10/22 10:30～16:00	(外部講義)『学習支援の実践者から学 ぶ～小学校編』村瀬英昭(岩倉市日本 語・ポルトガル語適応指導教室主任); 名古屋国際センター主催「外国人児童 生徒サポーター養成研修～現場に必 要な力～」	外国人児童生徒を取り巻く環境(外国人の意 識の変化、岩倉市の取り組み、外国人児童生 徒の学習家庭環境)。日本語指導法(実際の 指導で配慮すべき事項と心構え、日本語教 科テスト、評価・課題・テキスト、日本語能力に 応じた日本語指導法・具体的指導例)	村瀬英昭(岩倉市日本語・ポ ルトガル語適応指導教室主 任)	10 人
2012/2/11 15:00～17:00	(フォローアップ講座)アメラジアンと は?～「フラットな世界」をつくるために ～	アメラジアンとは(歴史と現状)。個人史を語 る。外国につながる子どもや若者の居場所。 多文化共生社会をつくるには	市川トーマス友基(全国在日 外国人教育研究協議会生徒 交流会元実行委員会、現在 Little Rock(アメラジアン活動 家)として活動中)	5人
2012/2/19 15:00～17:00	(フォローアップ講座)日本で生きていく ダブルの子ども～個人史から～	個人史を語る。人権教育と在日外国人教育。 ダブルの子どもに関わる課題	三木パンガヤン幸美(関西 外国語大学・とよなか国際交 流協会子どもサポート事業ボ ランティア)	6人
2012/2/24 15:00～17:00	(フォローアップ講座)子どもサポート事 業にやってくる渡日の子ども、日本生ま れの子ども、ダブルの子どもの状況と課 題	協会サポート事業(母語教室・学習支援サン ブレイス)にやってくる子どもの状況。子どもの まち「たぶんかミニとよなか」の取り組みについ て	金和永(大阪大学・とよなか 国際交流協会子どもサポー ト事業ボランティア)	6人



養成講座：講義形式で子どもの日本語指導についての基礎的な知識を学んだ後、グループになり、来日したばかりの子どもに日本語を教える際の指導案を話し合って作成した。



養成講座：日本語学習が必要な子どもに対する指導、指導記録、終了後の意見を交換など。



養成講座：模擬授業やロールモデルなどとおして、指導方法について学ぶ。

(10) 講座の評価

①受講生に対するアンケート

養成講座参加者の感想:事業実施直後(抜粋)

- ・学校現場における個々の子どもの状況に合わせた日本語指導の必要性がよくわかりました。同時に指導方法や指導員の確保、養成、継続については、学校も地域も協力し、一人ひとりの子どもが、将来豊中市の国際的な視点を持った人材に育ってくれるよう多くの人がかかわれる体制ができることが大切だと感じました。
- ・豊中市内の公立小中学校で、多くの外国人児童及び帰国児童がいるという事実を初めて知り驚きました。私にもちょうど同じ年頃の子どものおり、各学年において、数々の授業風景や子どもたちの様子を見てきましたが、いわゆる「日本人」の児童生徒でも毎日の授業を理解するのが大変な状況の中で、日本語をしっかりと理解出来ていない外国人、帰国児童および生徒が学校生活を送るのは非常に難しいということがよくわかりました。
- ・日本語がはじめての子どもにある程度のスピードで教えるということの難しさを感じました。学校では、一日一文字のひらがなを、いかに興味をもたせて学習させるか？いかに楽しい内容になるか？というあたりが大切だと思います。渡日の子どもには“教え込み”というスタイルになりがちなので、心苦しく思いま

した。どんな教科でも担任、担当の教師の意識の持ちかたによって、日本語指導ができるということがよくわかりました。また難しい言葉でも、体系的に整理することでわかりやすくなるということは、現場の学校でも多いに役立ちそうで、すごい発見でした。今後、豊中市の各学校にも日本語指導者の派遣が充実できるようにがんばります。そして、各教師が渡日児童に寄り添い、何らかの行動、指導ができるようにしていきたいです。

養成講座参加者の感想:事業終了時期(抜粋)

- ・ 子どもたちがその背景にどのような文化を備えているかという視点を持ち指導することの重要性を、実際指導していくなかで改めて感じた。日本で生まれて日本で生活している外国人の子どもは、親が日本人である子どもと比較して習得している語彙が少ない。そうした子どもへの指導では、その子が何を知らなくてどこで躓いているかを探ることに力を入れた。
- ・ スーパーバイザーの田中さんの指導方法は画期的であった。たとえば形容詞や動詞の過去形の單元では、随所に工夫された田中さんのオリジナルの指導方法を学んだ。実際子どもたちはみるみるうちに覚えていったので、「なるほど」「すごい」と思った。田中さんの指導方法を自分自身のオリジナルの指導法として再習得していくことが今後の課題である。

②実施主体からの研修内容結果評価

〈1〉日本語指導が必要な子どもをめぐる状況及び社会的課題の発信

養成講座への問い合わせ・申し込み、また実際の参加者の多さから、子どもの日本語指導に対する社会的関心の高さがうかがわれた(豊中市全戸に配布される広報誌で広報)。しかし、実際子どもたちがどのようなことで日々困難を抱え、学習環境や社会環境にどのような社会的課題があるかについては今回の講座を通して知ったという声が多くあった。地域国際交流協会の役割として、養成講座開催に限らず、地域の国際化の現状、特に子どもの置かれた状況や社会的課題を、広く発信していく必要がある。

〈2〉地域資源を活用した「子どもの日本語指導者」という専門分野の開拓

日本語指導者養成では、日本語診断、カリキュラム、指導計画作成、指導記録など実践的研修を多く取り入れたプログラムを企画した。このような専門的指導者育成を可能にしたのは、スーパーバイザーによるサポート・指導体制による側面が大きい。学校現場においてもまだ日本語指導が制度的に十分に整備されておらず、指導者も明確に位置づけられていない現状があるなか、地域の豊富な資源をもちいることで子どもの日本語指導者育成が可能になり、専門分野として開拓していくことの可能性と重要性を確認できたことは、今後の教育現場をめぐる支援・指導のあり方に示唆となる。

③実施主体からの外国人支援体制等今後の計画

養成講座を経たとよなかこども日本語教室のボランティアからなる団体「とよなか JSL」(日本語指導者グループ)が結成された。また、豊中市の実施する2011年度「協働事業市民提案制度」にとよなか JSL が申請し、採択された。その際、豊中市に必要性を認められたことにより、豊中市と一緒に大阪府の「新しい公共支援事業制度」に応募することに結びついた。2012 年度からは、新しい公共事業のひとつとして豊中市及び豊中市教育委員会ととよなか JSL が、子どもの日本語指導の教室やシステムづくりに取り組む予定である。(事業名:「学校と地域資源の有機的な連携による、日本語力を通じた学習権と生活保障のためのシステムづくり」)

(11) 事業の成果

① 他事業との連携

- ・とよなか国際交流センターには外国人市民の「磁場」が既に築かれており、日本語指導や外国人支援、教育実践に取り組むボランティアや実践者、専門的な知識と技術をもつ経験豊富な人たちが集う「土壌」がある。本講座に参加したボランティアの中には、協会の他事業のボランティアを行っている人がいたり、また養成講座を受けたことで協会の他事業に関心をもつなど、協会事業が豊かなネットワークを広げつつある。
- ・養成講座を豊中市教育委員会と共催で行ったことで、豊中市に登録している通訳者が本講座に多く参加した。2012 年度から開始する協働事業向けに、行政と地域の強みと弱みが補完された、システムと資源との有機的・循環的なしくみづくりへの端緒となった。

② 研修後の人材活用

養成講座後に、「とよなかこども日本語教室」(【日本語教室の設置運営】)を設置し、修了生がボランティアとして子どもたちの日本語指導にあたった。養成講座の講師が引き続き日本語教室の教授者をおこなったので、修了生ボランティアは同じ人から継続して日本語指導についての助言をもらい、指導力をのばしていった。2012 年度から新しい公共の場づくりのモデル事業として市教委との協働事業が始まり、本講座の修了生が指導にあたる。(事業名:「学校と地域資源の有機的な連携による、日本語力を通じた学習権と生活保障のためのシステムづくり」)

(12) 今後の課題

- ・地域国際交流協会の役割として、地域の国際化の現状、特に子どもの置かれた状況や社会的課題を広く発信し、地域の中で子どもを守り支える支援者を増やしながら、ともに子どもの教育保障のしくみづくりに取り組む。
- ・本講座で目指した日本語指導者という専門的分野の開拓が、地域や学校でその重要性を認められ制度的に位置づくために、教育委員会を始めとする行政との連携を一層推進していく。